

【 講 演 会 】

—午後1時～午後2時—

= 鳥海山の会会員による講話 =

「私と鳥海山」

(話者)

由利本荘市俳句会会長 北島保雄氏

本荘山の会顧問 安藤武俊氏

—午後2時～3時30分—

「鳥海霊峰の神秘の歴史」

—鳥海山学の構築に向けて—

元秋田大学学長

秋田大学名誉教授 文学博士

秋田県立博物館名誉館長

新野直吉先生

日時 平成20年5月31日(土)

会場 由利本荘市鶴舞会館 講堂(3階)

主催 鳥海山の会

連絡先 TEL 0184-53-3453 (多田方)

【鳥海山の会の講演会】

〔講師のプロフィール〕

元 秋 田 大 学 学 長
秋田大学名誉教授 文学博士

新 野 直 吉 先 生

1925年山形県西置賜郡小国町生まれ、東北大学卒業後、秋田大学で長い間教壇に立たれ、1991年に秋田大学長に就任。東北古代史研究の第一人者として数多くの著作物を刊行されている。これら功績が認められ、県教育、文化功労賞、河北文化賞などを受賞。2000年には勲二等旭日重光章を受章される。

退官後に県立博物館館長を務められ、現在県立博物館名誉館長。

〔講師の主な著作物〕

『多賀城と秋田城』『律令古代の東北』『古代東北の覇者』『日本古代地方制度の研究』『古代史上の秋田』『古代東北の謎』『古代東北の兵乱』『古代日本と北のみち』『古代東北と渤海史』『秋田美人の謎』など多数

◎会員による講話 「私の鳥海山」

〔講師のプロフィール〕

○北 島 保 雄 氏

矢島在住で旧矢島町役場に勤務。早くから句作に親しまれ、現在由利本荘市俳句会の会長として、市内の俳句会の指導や俳句の普及に努められ、県内外で活躍されている。

今回は、鳥海山を自作の句で詠まれた作品を中心に文学的な視野からお話されます。

○安 藤 武 俊 氏

「本荘山の会」の顧問で登山家の大ベテラン。長い間教職につかれ、一方では、若い登山家を数多く育てられた。これまで世界各地の山々に数多く登られ、鳥海山にも東西南北の各方面から踏破されている。最近は海からも鳥海山を眺望されている。

『鳥海靈峰』神秘の歴史

鳥海山の会：於鶴舞会館

平成二十年五月三十一日

山の名 昨年十一月九日の佐々田教育長の研修講演にあったように古代には鳥海の名はなかった。

大物忌神 を先学は『日本書紀』天武天皇四年四月条の「大忌神を広瀬の河曲に祭らしむ」に結び付ける説（鈴木重胤『日本書紀伝』）や、倉稻魂神とする説（栗田寛『神祇志料』）を援用しているが当たらないと考えている。

所出史料年表

承和5年（836）…5月11日「出羽国従五位上勲五等大物忌神に正五位下を授け奉る」（『続日本後紀』）。

7年（838）…7月26日「出羽国飽海郡正五位下勲五等大物忌神に従四位下を授け奉る。

余は故の如し。兼ねて神封二戸を宛てる」（同上）。

貞観4年（862）…11月1日「詔す、出羽国正四位上勲五等大物忌神を以て、官社に預かる」。

6年（862）…2月5日「出羽国正四位上勲六等月山神に従三位を、正四位下勲五等大物

忌神に正四位上を授く」。11月5日「出羽国正四位上勲五等大物忌神に従

三位を授く」。7年2月27日「出羽国正六位上城輪神、高泉神並に従五位下」

10年（868）…4月15日「出羽国言すく飽海郡月山大物忌兩神社前、石鏃六枚雨る。」と。」

13年（871）…4月8日「山上火有り、土石を焼く。又声有り雷の如し」と5月16日条に。

15年(873) …4月5日「出羽国従三位勲五等大物忌神正三位」。

17年(875) …11月16日「出羽国言す。渡嶋の荒狄反叛し、水軍八十艘、秋田・飽海
両郡百姓二十一人を殺略す。牧宰に勅して平定せしむ」。

18年(876) …8月2日「出羽国従三位勲六等月山神に正三位を授く」。

元慶2年(878) …7月10日「出羽国正三位勲五等大物忌神、正三位勲六等月山神並に封戸
各二戸を益す。本と併せて各四戸」。8月4日「彼国正三位勲五等大物忌
神を勲三等に進む。正三位勲六等月山神は四等に、従五位下勲九等袁物
忌神は七等に」

4年(880) …2月27日「出羽国正三位勲四等月山神、正三位勲三等大物忌神並に従二
位を受け、従五位下勲七等袁物忌神、城輪神は並に従五位上」

8年(884) …9月29日「出羽国司言す〈今年6月26日秋田城雷雨晦冥、石鏃二十三枚雨
る。7月2日飽海郡海浜石雨り鏃に似る。其の鋒皆南に向く〉と」。陰陽
寮占ひて云はく「彼の国の憂、応に兵賊疾疫に在り」と。

仁和1年(885) …11月21日去る6月21日、出羽国秋田城中及び飽海郡神宮寺西濱石鏃雨る。
陰陽寮言す「当に凶狄陰謀兵乱の事有るべし」と。神祇官言す「彼国飽海
郡大物忌神、月山神、田川郡由豆佐乃売神以俱に此の恠を成す。崇不敬に
在り」と。勅し国宰に諸神を恭祀し、警固に慎しましむ。(以上『三代実録』)

天慶2年(939) …4月19日、官符「正二位勲三等大物忌明神山燃御占有る事」を出羽国に達
す。天慶の乱に関して。(『本朝世紀』) (新野 直吉)

鳥海山と俳句

北島保雄

(やす雄)

一、俳階について

俳階の俳、俳画の俳は「滑稽、笑い」である

二、ホッ句と俳句

正岡子規

門下生　　高濱虚子、河東碧梧桐、石井露月

三、碧梧桐　　鳥海登山(明治四十年)

雲霧や風は神よばひしてや鳴る

碧梧桐

四、鳥海山矢島口の句碑について

須貝てるき　　やまめ句会

鳥海に雲とどまらず秋涼し

てるき

五、私の俳句

満天の星　降るばかり　登山小屋

(祓川) S25

鳥海は　恍惚とあり　今朝の春

(八汐山) H7

裏鳥海　峨々と連なり　二月晴

(西目街道) H8

鉾杉の　天界にゐて　轉れる

(木境神社) H8

渺茫と　高原の枯れ　極まれり

(祓川湿原) H9

さつきと　幣の風起つ　山開き

(祓川) H19

鳥海山に学ぶ

安藤 武俊

鳥海山との出会い

私と鳥海山との出会いは、昭和26年、秋大2年のとき学芸学部に山岳部が創設されたときからはじまります。最初の山行が7月上旬の鳥海山で、矢島駅を降りるとすぐ歩きで水上、箆立場を経て新装なった祓川ヒュッテ一泊、翌早朝、山頂経由で御浜を通り、吹浦駅までの歩き通し、結構厳しい日程であった。幸い好天に恵まれはじめて目にする高山植物、雲海、雪溪、遠く of 山々、眼下の平野と日本海等々、強烈な印象として焼きついた。

さらに私を鳥海山の“虜”にしたのはその年の11月の初冬の鳥海であった。私ども山岳部員三名のため、祓川ヒュッテの管理人(故)佐藤康さんが不自由な足にかかわらずわざわざ祓川まで同行してくれたこと。お陰様で翌日、登山道の両側の木々に下がる霧氷、舍利坂のアイスバーン、頂上の岩氷群など初冬の鳥海山の魅力を存分満喫することができた。このとき以来鳥海山とそして康さんとの長い長い付き合いがはじまったと思っている。

山にのめり込む

昭和28年3月、当時としては珍しく本荘市内に住む山スキーの仲間が中心となり本荘山の会が結成され、私も学生でありながら入会し活動に参加した。こうして山登りも次第にエスカレートしていき、活動山域も鳥海山から東北、北海道、そして全国の山々へと止むこと知らず広がっていった。加えて20数回に及ぶ国外の山をふくめて随分あちこちの山に登らせてもらった。このような山行ができたのもその土台となったのは全て鳥海山であると信じている。

なにがこれほどまで山に魅せられ、魂を奪われ、親不孝家族不幸までしてのめり込んできたのかはすぐに言葉には出てこないが、自分では理屈もなにもなく「ただ好きだから登る」「楽しいから登る」としか言いようがない。従って私にとって山登りは「遊び」であると割り切ってきた。

「山がそこにあるから」などと悟ったようなことは言えない。勿論、名誉とか出世とかお金とか欲のために登るなど考えたことはさらさらない。

鳥海山の素晴らしさ、恐ろしさ

現在ではどこの登山道(口)も、約五合目付近まで車道が通り、日帰りでも十分鳥海登山ができるようになった。しかし、私は鳥海山の自然の素晴らしさをもっと深く体験するためには一度でいいから山頂での一泊登山をすすめたい。

昼は余裕をもってゆっくり登り、いろいろな高山植物や周りの景色や雲などを観察し、夕方赤く燃えるような夕映えの太陽が日本海に沈む壮大な落日の光景と反対の山々に映る「夕の影鳥海」。夜は満天降り注ぐ星空を眺め、朝には奥羽山脈の彼方から昇る荘厳なご来光と日本海飛島周辺に映る「朝の影鳥海」。運がよければ朝方に多く見られる雲海やブロッケン現象などの自然現象は日帰りの登山では到底出合うことはできない。

しかし、鳥海山はいつも美しさやすばらしさを私たちに与えてはくれない。日本海から2000mを超える標高にまで突き出ているこの山は3000m級の北アルプスの山々に決して引けをとらない。特に鳥海の冬山はいまでも怖い。逃げ場のない烈風と猛吹雪。寒気にさらされたときの恐怖感は例えようもない。

私自身も幾回となく危ない思いをし、また一緒に登った人たちを危機に直面させました。現在は私たちが登りはじめたころからみると、服装、装備、食料も格段とよくなり、四季を問わず登山者の数が多くなってきている。しかし、山は同じである。山は大きくて強い。甘くない。侮ったら必ずその仕返しを喰う。

鳥海山は人生の師

私は今まで鳥海山に60年近い年月をかけ、季節を問わず数百回ほど登ってきた。山は泰然自若、黙して語らないが、この間、多くのことを教えられ体験させてもらった。

自然の素晴らしさ、楽しさは勿論、厳しさ、恐ろしさ、遭難と生命の大事さ、気力・体力・忍耐の鍛錬、進む勇氣と退く勇氣、決断する力、自然の恵みと自然保護の啓蒙と実践、多くの山仲間との出会い、などなど。

鳥海山は私にとって心の”ふるさど”であり、“支え”であり、“人生の師”であると思っている。鳥海山と出合い、これまで長い間事故もなく登り続けてこられたことは本当に幸せであったと感謝の念でいっぱいである。

「私たちのやま鳥海山」として、子孫代々、未来にわたってより豊かな、美しい鳥海山であることを「鳥海山の会」のみなさんと共に願い、係わりあっていきたいものと念じます。

鳥海山にかかわる激動の10年間

昭和45年(1970年) ~ 昭和55年(1980年)

- 1、県営有料道路「鳥海ブルーライン」開通 昭和47年(1972)
象潟小滝 ~ 鉾立 ~ 吹浦
これにならい、各地で林道が観光道路化
鳥海山横断道路へ
鳥海林道 法体の滝~堰口 山采道路化
中島台林道 駒の王子~上郷 遭難 ゴミ放棄
- 2、鳥海山の火山活動 153年ぶりに起こる 昭和49年(1974)
2月27日 噴煙活動 水蒸気爆発
4月24日 再び活動 泥流、火山灰流
鳥海山麓に住む人々にとっては、暮らしにかかわる大事件
- 3、北東斜面にゴンドラ設置計画発表 昭和52年2月(1977)
計画案 アルペンスキーA級コース
祓川下の駐車場起点 標高1100m
7合目御田中間駅 : 1450m 全長4500m
9合目氷の薬師下終点 : 1800m 予算11億円
1日5000人 年間(4月~10月) 15万人
開発か自然保護かの大激論はじまる
「鳥海山の自然を守る会」準備会発足 代表 江幡勝一郎氏
「鳥海山の自然を守る会」結成 53年4月 会長 西岡光子氏
新聞紙上で数回にわたり激論
結果 佐々木喜久治知事 開発調査費 削除 白紙にもどる
- 4、下野愛一郎氏(花輪高校スキー部顧問)遭難行方不明 昭和53年7月
小畑知事の要請により自衛隊捜索出動(40名)
延べ1000名を超える捜索隊 手がかり無く現在に至る
- 5、鳥海山の標高 2237mから2236mへ
定点観測から光波観測の結果
- 6、植村直己氏 本荘講演「極北を駆ける」 昭和54年9月(1979)